

〔第12回学術集会教育講義〕

## 日本の老いの文化—民俗学の視点から—

国立歴史民俗博物館

関沢まゆみ

## I. 民俗学の老人論

これまで民俗学において老人を論じたものとしては、古くには柳田国男<sup>1)</sup>(1931)、折口信夫<sup>2)</sup>(1928)らの老人論があり、近年のものでは宮田登<sup>3)</sup>(1996)や山折哲雄<sup>4)</sup>(1984)らの老人論がある。柳田は先祖のイメージとしての老人を論じ、折口は「翁の発生」に代表されるように芸能化された翁を中心に論じた。柳田や折口は老人を通して先祖の霊や神についての理解を十分にしようとしたのであった。その後、1980年代以降、宮田登や山折哲雄らによる老人論・子供論が試みられるようになるが、それはV. ターナー<sup>5)</sup>(1969)の中心・周縁論を援用したものであった。老人と子供を大人に対してその周縁的存在として位置づけ、両者のもつ靈性或神聖性が指摘されたのである。このように柳田、折口の老人論から宮田、山折の老人論にいたるまで、子供・老人の靈性或神聖性などが指摘されてきたが、ただそれらはいずれもイメージとしての老人観が先行しており、必ずしも実生活の中の老人を直接観察したデータにもとづくものとはいえない。

## II. 宮座と長老

近畿地方やその周辺の若狭、播州、また伊勢志摩地方の村落には村落運営から引退した後のつとめとして高齢の男性たちが氏神の世話など一定の信仰的な役割を担うことが定められている村落が多い。それらの村落における伝統的な氏神の神社の祭祀組織は宮座と呼ばれ、歴史学や民俗学、宗教社会学の分野において、その祭祀組織としての側面についての研究

は長く行われてきた<sup>6)</sup>。そして当屋制と長老制と呼ばれる仕組みに宮座の特徴があると認められてきた。筆者はこの宮座の担い手の中心が老人であることに注目し、宮座を従来の祭祀組織としての分析だけでなく、老人個人々の立場からの分析をもあわせて行うようにしてきた<sup>7)</sup>。

ここではその研究成果の一部として、滋賀県甲賀市水口町北内貴の十人衆と呼ばれる宮座の長老衆の例を紹介してみよう。

## 1. 十人衆の組織と役割

北内貴は現在81戸の集落であるが、そのうち旧来の家35戸が村落運営の中心的役割を果たしている。この家々の戸主は数え年の65歳になるとその3月に村を隠居する習慣が続いている。そして、ヤクハリ(役張り)と呼ばれる村落運営へ一家の代表として参加する権利を長男に引き継ぐのである。ヤクハリになると、毎月1回の参会と呼ばれる寄合への出席、区長ほかの役職をつとめること、村の共同労働への参加、そして檀家になっている養福寺(浄土宗)と氏神の川田神社の行事への参加などが義務付けられる。寄合の座順や区長をつとめる順番は年齢順に決められる。とくに寄合では1歳でも上の人物が上座へ座ることになっている。しかも、同じ年に生まれた人物がいた場合には、生まれた月日を比べるのではなく、その父親の生まれた年を比べて、1年でも早く生まれている方を上座にするオヤオトナ(親大人)と呼ばれる村独自の年齢基準を有している。

村を隠居した後の組織として、十人衆と呼ばれる長老組織がある。その十人衆のうち最長老をとくにワンジョウと呼ぶのが慣わしとなっている。氏神の川田神社を中心に年間約30回ある村の祭祀のたびに、十人衆のうち年齢が若い若役がワンジョウ以下

十人衆全員へ「呼び使い」を行う。そして若役と当屋は神饌の準備や直会の食事の準備、境内の清掃を行う。そして十人衆は村人の代表として祭祀に参加するのである。

北内貴では、男子は65歳までは村落運営の主体となって働き、65歳で村を隠居した後は、神社祭祀や寺堂の世話を行うというように、年齢の推移ともなって、世俗的役割から信仰的役割へと役割の変化が制度として存在していることがわかる。

十人衆は終身制であるため、1人欠けると次の年齢の順番の者が加入する。1986年時点の十人衆と2005年時点の十人衆の成員を比べてみると、この約20年の間には100歳になる倉田松三氏、91歳の倉田千蔵氏、84歳の倉田市之助氏の3名だけが残り、他の7名は亡くなられ、新しい成員になっていることがわかる。1986年当時は最長老の宮本利三郎氏(90歳)は体調がおもわしくなく十人衆の行事にも欠席していたが、他の9名が倉田松三氏を中心に行事を行っていた。しかし、現在2005年では、最長老の倉田松三氏をはじめ高齢の5名は皆体調が悪く、十人衆の行事には欠席で、若い方より5名が神社への奉仕を行っている。

#### 十人衆の成員

1986年3月現在		2005年8月現在	
名	前 生年	名	前 生年
宮本利三郎	M 29	倉田松三	M 38
倉田松三	M 38	倉田千蔵	T 3
倉田友吉	M 42	倉田市之助	T 10
倉田清兵衛	M 43	倉田一夫	T 13
倉田清太郎	M 44	倉田平八郎	T 14
倉田源三郎	T 2	倉田惣一	T 15
倉田佑二	T 2	倉田治行	S 3
倉田千蔵	T 3	倉田儀三郎	S 3
倉田定一	T 7	倉田敬太郎	S 3
倉田市之助	T 10	倉田亮一	S 5

十人衆に加入すると、やがて健康を損ない、いわゆ

る寝たきりになったとしても生きているかぎり神社への奉仕が役割として課せられ、それを放棄することはできない決まりになっている。実際、1986年当時のワンジョウ、宮本利三郎氏はその3カ月後の6月に亡くなったが、その晩年、昭和59(1984)年の日記を一部を抜粋してみると以下の通りである(下線は筆者。十人衆の行事の名称)。

1月1日曇	朝雑煮ヲ祝ウト床ノ中。若イ者ハ年始廻り、おつハ子供3人連レテ彰、利ハみのべ、敬一夫様
1月2日	朝食済マスト床ノ中。喜三、彰、子供2人、きく、一夫様。彰年玉10000圓クレル、毎年気ノ毒
1月3日曇後雨	今日モ床ノ中。夕方カラ雨
1月4日曇	ヨイ正月休ミ
1月5日曇	澄子ガ手帖ヲ買ッテクレタノデ早速日記ツケル
1月6日曇	<u>勧請吊り</u> 。朝9時から勧請吊り。友様三人が紙切り昼前帰ル。源三郎様(布令)茶ヲ出シテクレル
1月7日晴	<u>敬知</u> 。9時宮様参り。五人衆ダケ直会さしみ宿儀三郎、要太郎様(今年今年此ノ山ニ良キ物アラバ射止メヨ)。11時帰り 射手清兵清太両君。昼カラ寝ル
1月8日	寝床ノ中
1月9日	柚中の作太郎様来ル、何ノ用カ知ラヌガ利ト話ヲシテ居ル
1月10日晴	<u>花ノ戸</u> 。前10時宮様参り。式後直会(巻すし2杯、肴色々2杯)。後2時一足先キニ帰ル。ソレカラ昼寝
1月11日雪	何モセズ寝床ノ中
(以下抜粋)	
2月11日晴	<u>建国祭</u> ナレ共道ガ悪イノト寒サデ詣ラズ
2月20日晴	10時カラ <u>揚矢祭</u> 、不参スル
2月22日晴	<u>祈年祭</u> 、不参スル、寝暮シ
4月25日晴	9時に <u>祭典</u> 始マル。玉串奉典
4月29日	<u>神饌田奉耕者奉告祭</u> 。9時ヨリ玉串上ゲ

ル。10時直会、宿千蔵様。すし、鯖酢重箱モノ。11時一足先二帰ル

これは大学ノートに短く書かれているものであるが、家族や自分のことなど私的なこととワンジョウとしての公的なこととの両方の記述がなされていることがわかる。とくに十人衆の行事が行われた日には必ずそれについての記述があり、身体が衰退していくなかでワンジョウとしての責任感を最後まで有していたことがわかる。

## 2. 倉田松三氏の老後の生活の変遷

現在100歳のワンジョウ、倉田松三氏は、昭和20(1945)年に父親からヤクハリの権利を引き継ぎ、村に出るようになった。その後、昭和42(1967)年62歳の時に十人衆に入り、若役として世話役をつとめるようになった。当時は、現在ほど高齢者が多くなかったため、村を隠居するのよりも3年早く十人衆入りをする事となったのである。そしてS45(1970)年、65歳になって村を隠居し、息子にヤクハリの権利を引き継いだ。隠居後は、家の農業も息子が中心となったので、松三氏は大好きな菊作りに夢中になり、菊が好きな友人との交流の輪を広げていった。しかし、70歳代後半になるとリューマチを患い、手先が思うように動かなくなり、菊作りをあきらめねばならなくなった。「もう何の楽しみもない」と思っていたときに、同じ水口町内の柚中に住む友人から、東京女子大学の学生の民俗調査実習報告書『甲賀柚中の民俗』(1983)を見せられ、「これなら、自分にも書ける」と思い、すぐに北内貴の村の歴史と民俗について原稿を書くことを始めた。こうしてS59(1984)年、松三氏79歳の時に『ふる里北内貴』(1985)を自費出版した。その本には、「私も今は茲に之(村の伝統的な行事の内容と由来など)を求められて、私も及ばずながら少しでも之にこたえることが出来得る様であればと思ひ之を取り上げ、此の村の上古より現在に至る歴史、民俗資料をさぐって見ました。(中略)又、我が村の五人衆、十人衆とは如何なるものか、如何なる事をしているかを皆さんによく認識して戴かんが為に之を取り上げて茲に

其の一端を記しました」(『ふる里北内貴』より)と、執筆の動機が書かれており、村の歴史を若い人たちのために書いておきたいという松三氏の責任感がよくあらわれている。

そして、昭和61(1986)年81歳の時に宮本利三郎氏の跡を継いでワンジョウとなった。それをきっかけに自分史『老松の花』(1991)を自費出版した。その後は、「書くこともなくなった」と思っていたところ、また友人から歌を作ることをすすめられた。「歌なら寝ていても作れる」といわれ、青年時代に冠句会に応募したりしたこともあった松三氏は、五七五七七の歌を作っては短冊に書いてアルバムに貼ることをはじめた。このアルバムには「老いの道草」という題名で、菊のこと、亡くなった妻のこと、十人衆の宮詣のこと、友人が訪ねてきたこと、テレビのニュース、四季折々の自然の移ろい、等々について書かれている。これらの歌をみると、松三さんにとって歌作りは、誰かのために書くというのではなく、自分の世界を表現しておきたい、「私を書いておく」という自己表現の一つであることがわかる。そしてこの歌作りは100歳になった今も続けられているのである。

この松三氏の例から、老年期の加齢に伴う肉体の衰退と精神の充足欲求との関係について、次のようなことが指摘できるのではあるまいか。まず、精神的な充足とは何よりも趣味や関心を共有する友人との交流であり、自己表現と他者理解とである。そして、菊作りのような肉体で実行する自己表現の方式が不可能となった後は、歴史の記述や歌作りなど言語による自己表現へと移行する。そしてそれは最後の欲求であり、こののちたとえ病床で発言能力を失った状態となってもその欲求は人生の最後の最後まで残されるのではないかと思われる。

## III. 自己変革していく老人

この事例をはじめ、その他多くの宮座の長老についての観察から指摘できるのは以下の二つの点であ

ろう。第一に、宮座の長老の権威の淵源とは年齢や年玉を重ねていること、つまり長寿の生命力に対する尊崇の念<sup>8)</sup>、宮世話や神祭りの奉仕の実績、過去の事実である歴史や由緒を知っていること、つまり物知りであるということ、この3点である。第二は、宮座の長老といえども日常生活の中ではただの老人である。しかし、その老人が宮座の役をつとめることによって変わっていく、自己変革していくという点である。役割に応じた責任感と同時に風格がそなわっていくのである。宮座には老人に誇りを持たせる自己啓発の仕組みがあるといつてよい。そもそも自己変革とは成長する柔軟な若者世代に固有と考えられているが、その自己変革が宮座という組織と制度のなかでは老人たちの間でも見出すことができるのである。

## 参考文献

- 1) 柳田国男：明治大正世相編，柳田国男全集 26，ちくま文庫，1990(1931)，同 先祖の話 柳田国男全集 13，ちくま文庫，1990 (1946)
- 2) 折口信夫：翁の発生，折口信夫全集 2，中央公論社，1975 (1928)
- 3) 山折哲雄：神から翁へ，青土社，1984
- 4) 宮田 登：老人と子供の民俗学，白水社，1996
- 5) V. ターナー(富倉光雄訳)：儀礼の過程，思索社，1976 (原著 1969)
- 6) 肥後和男：近江に於ける宮座の研究，東京文理科大学文科紀要 16，1938，同 宮座の研究，弘文堂，1941，原田敏明：村の祭祀，中央公論社，1975，同 村祭と座，中央公論社，1976，関沢：宮座と墓制の歴史民俗，吉川弘文館，2005 ほか
- 7) 関沢：宮座と老人の民俗，吉川弘文館，2000
- 8) 関沢：隠居と定年一老いの民俗学的考察一，臨川書店，2003